

# 総称文研究の新展開

岩 部 浩 三

## Abstract

Sara-Jane Leslie, who is a professor of Philosophy at Princeton University, is presenting a new framework for the study of generic sentences. Generic sentences like "tigers are striped", "ducks lay eggs", and "sharks attack bathers" are all acceptable as generalizations.

But, as is well known, it is difficult to give a semantic account for these sentences, since their apparent truth conditions are very different from each other: All normal tigers are striped, less than half of the ducks lay eggs, and very few sharks attack bathers. Leslie shows that generic sentences are based on the default generalization, which is non-quantificational in nature, and that children acquire them earlier than the explicit quantifiers like *all* or *some*.

I certainly agree with Leslie's claim that children easily develop the ability of non-quantificational default generalization. But generic sentences are actually not uniform. Specifically, the subjects of generic sentences have three different forms in English: the indefinite singular, the definite singular, and the bare plural. I assume that the variety of generic sentences reflects the dual aspect of the human cognitive capacity, and propose that while some of the generic sentences are non-quantificational, the others are definitely quantificational.

Although there has been a long controversy between quantificational and non-quantificational approaches to generic sentences, I believe that they will naturally reconcile in the framework of Leslie's. In this paper, I will assort issues to solve and try to sketch the way to the goal.

## 1. 総称文の謎

本稿は、近年総称文の研究に枠組みの大転換をもたらしているSara-Jane Leslieの主張を紹介し、その視点から従来の総称文研究の問題点がどのように解決されるか、また今後どのように発展できるか、その見通しを示した論考である。プリンストン大学哲学科教授であるLeslieは、Leslie (2008) において、総称文の次のような特徴に注目している。本節では、これらの特徴を概観する。

- (1) 総称文に対する真偽の判断は明確である。
- (2) 総称文の真理条件を統一的に記述することは非常に困難である。
- (3) 総称文には明示的な数量詞がない。
- (4) 子供は容易に総称文を獲得する。

まず、次の(5) - (8) はいずれも容認可能な総称文である。<sup>1</sup>

- (5) Tigers are striped. (トラには縞模様がある)
- (6) Birds lay eggs. (鳥は卵を産む)
- (7) Mosquitoes carry the West Nile Virus. (蚊は西ナイルウイルスを媒介する)
- (8) Barns are red. (納屋は赤い)
- (9) Sharks attack bathers. (サメは海水浴客を襲う)

しかしながら、これらの総称文は数量的に同等ではない。総称文は一般に例外を許すことが知られており、(5) - (9) のいずれにも主語にallを付加することはできない。総称文の便宜的な言い換えとしてmostを用いることもあるが、上の例でそれが当てはまるのは(5)と(8)だけであり、(6)、(7)、(9)については適切ではない。卵を産む鳥は成熟した雌だけであって該当する個体は半数以下であり、(7)と(9)にあっては実際に当てはまる例はきわめて稀である。したがってこれらについては、数量詞を割り当てるならばせいぜいsomeによる言い換えしかできない。しかし、同様に(5)や(9)をsomeで言い換えた場合、元の総称文よりはるかに弱い主張内容となってしまうため、すべての総称文をsomeで言い換えてしまうわけにもいかない。

その一方で、多数の例について当てはまるのに総称文としては受け入れられない場合もある (Cohen (1999a, 1999b, 2004) 参照)。

(10) #Books are paperbacks. (#本はペーパーバックである)。

(11) #Birds are female. (#は雌である)

本の大半はペーパーバックであるのに (10) は成り立たない。また、卵を産むのは雌の一部であるから、個体数としては (6) より (11) の方が多数であるにもかかわらず、(11) は明らかに受け入れられない。<sup>2</sup> このように、総称文は数量的に値を特定することができないため、真理条件を統一的に記述することができず、意味論的な説明が困難であった。

その一方で、明示的な数量詞 (有標数量詞) のmostやusuallyのついた (12) や (13) は容認可能である。

(12) Most books are paperbacks.

(13) Books are usually paperbacks.

allやsomeだけでなく、上記のmostやusuallyも有標数量詞であり、これらは過半数のような一定の数量的な値を与えることによって記述することが可能である。

その一方で、総称文は幼児によって容易に習得される。Leslieは心理学実験に基づいたHollander et al. (2002) を参照し、総称文が3歳以前に身につけているのに対して、allやsomeなどの基本的な有標数量詞が4歳以降になって初めて習得されることに注目している。

以上の所見を総合すると、Leslieが「総称文の謎」と呼ぶ状況が明らかになる。総称文には数量的に特定の値を与えることができず、真理条件の記述が困難であるにもかかわらず、総称文の真偽判断ははっきりしており、3歳以前の早い段階で容易に習得される。数量的に明確な有標数量詞よりもむしろ容易に習得できるのである。(5) ~ (9) の例で見たように、総称文にはこのような明示的な数量詞が伴っていないが、これは英語に限った現象ではない。人間のどの言語にも総称文は存在しており、基本的にどの言語においても有標数量詞を伴わないことが観察されている。このように姿も見えず、数量的にも一定でない「数量詞」を、幼児が容易に習得できるのはなぜだろうか。

## 2. Leslieの提案

前節では、総称文の研究が、Leslieの一連の論文によって、枠組の転換を迎えており、彼女が、総称文の見えない演算子と有標数量詞をまったく別の

ものとして区別していることを見た。すなわち、総称文の数量化分析で仮定されるGenはデフォルト演算子であって、mostやallなどの有標数量詞と異なり、数量的には特定されないと言う。<sup>3</sup> さらに、人間の認知能力はデフォルト的方法を用いるシステム1と数量的処理を必要とするシステム2に分けられるというKahnemanらの心理学研究の結果に基づき、総称文のGenはシステム1、有標数量詞はシステム2に属すると主張している (Leslie (2007:398))。また、システム1が大人になっても存在していることは、例えば次のような質問に対して、計算を省いて即座に10セントと答える例が数多く観察されることから示唆されるという。

(14) A bat and a ball cost \$1.10 in total. The bat costs \$1 more than the ball. How much does the ball cost? (Kahneman (2002))

計算上の正解はもちろん5セントである。この例からだけでは、単なる引っかけ問題のような印象もぬぐえないが、実際に大人の認知能力に二重性があると考えると、従来うまく折り合いの付けられなかった総称文に関するさまざまな観察結果が整理できるように思われる。

既に述べたように、Leslieによれば、デフォルト的認知能力に基づく総称文は3歳以前に身につけているが、有標数量詞は4歳以降に習得されるのであった。このような数量的処理に基づかない認知能力が人間に備わっており、幼い時期からそれが発動されることが人間の生存にとって有利に働くことは、容易に想像できる。少ない例でも成り立つ(7)や(9)のような総称文を、LeslieはStriking Genericと呼んでおり、内容的に人間の生死に関わるような例が非常に多い。ここでは、蚊がウイルスを媒介する確率やサメが人を襲う頻度が問題なのではない。わずかでもそのような可能性があるならば、それを避けることが重要である。蚊に刺されたらすぐに知らせること、サメの居る場所には近づかないこと、である。母親が総称文の形で述べることをいわば鵜呑みにするように子供が身に付け、それに従って迅速に行動することが危険回避につながるからである。数量的な演算能力が身につけていない幼児期だけに限らず、大人になってからもじっくりと数値計算してはかえって生存に不利益となるような場面は少なくない。デフォルト的認知能力に基づいた総称文の存在意義は明らかであろう。

逆に、数量的には多くても総称文が成立しない例はすでに(10)や(11)で見た。Genが一定の数値で表せないことは、(11)のような例によっても

明らかであった。

(11) #Birds are female.

(6) Birds lay eggs.

(11) は (6) より多くの個体に当てはまるのに総称文として成り立たない。これについて、Leslieは、「総称文には肯定的反例 (positive counter-instance) があつてはならない」と主張している。つまり、(11) では「雄の鳥」が肯定的反例である。(6) においては、反例は「卵を産まない鳥」であり、これは否定的反例 (negative counter-instance) であるため、総称文として成り立つという。もし、肯定的反例の「卵を産む以外の繁殖方法をとる鳥」があれば、(11) と同様、総称文として成り立たなくなるはずである。

### 3. Leslieを再検討する

#### 3. 1. 不定単数形の総称文

総称文の分析を数量的問題から解放し、人間にとって有意義な一般化とは何かという視点から総称文をシステム 1 に位置づける道を開いた点で、Leslieの功績は非常に大きい。ただし、すべての総称文がシステム 1 に含まれるとは言えないであろう。Leslieは、心理学者との共著論文 (Leslie et al. (2009)) において、(5) (6) (8) (9) のような無冠詞複数形の総称文と不定単数形の総称文との違いを実験的に検証している。ここでは、無冠詞複数では顕在化しなかった違いが現れる。

(15) A tiger is striped. (Principled Generic)

(16) A bird lays eggs. (Characteristic Generic)

(17) ? A barn is red. (Majority Generic)

(18) ? A shark attacks bathers. (Striking Generic)

上から2つの例文は、複数形 (5) (6) でも単数形 (15) (16) でも成り立つが、複数形の (8) (9) と異なり、対応する単数形 (17) (18) は受け入れにくい総称文である。<sup>4</sup> 従来、不定単数形主語の総称文には、主語と述語の間に内在的必然性があると指摘されていた。Prasada (2010)によれば、例えば(15)は「トラは、トラであるが故に、縞模様がある」という言い換えが可能である。

3歳以前の幼児は、複数形の総称文と有標数量詞 (all, some) との区別

ができず、すべてを総称文として解釈してしまうという観察があるが (Leslie & Gelman (2012))、ここで見られる単複の区別も幼児には不可能ではないかと予測される。

(17) から分かるのは、Majority Genericには単数形が使えないということである。Majority (過半数) という概念は明らかに数量的処理を必要とする。実際、明示的な数量詞を伴えば、容認可能性は高まる。

(19) A barn is usually red.

よく知られているように、不定単数形の名詞句は種を表すことができない点で無冠詞複数形や定単数形と異なる。不定単数形が表すのは基本的に1個の個体であり、種レベル述語とは共起できない。

(20) \*A dog is widespread.

(21) Dogs are widespread.

(22) The dog is widespread.

総称文は一個体について述べた文ではなく、それが種全体について何かを述べようとすれば、少なくとも複数の個体を導入する仕組みが必要である。そのためには数量詞がなければならない。上で述べたように、不定単数形の総称文はある種の内在的必然性が認められる場合に限って可能であった。

(23) A dog has four legs.

(24) Dogs have four legs.

(25) ?A table has four legs.

(26) Tables have four legs.

表面上、(23) には数量詞が含まれていないが、(25) との間には容認度の差がある。もし、(25) に必然性を表す法助動詞mustを補ってやれば、これは問題ない。すなわち、岩部 (2012) で指摘したように、(23) に認められる必然性は、主語と述語の関係からmustと同様の働きをする演算子が含意されるからであり、不定単数形で容認可能な総称文には見えないMUSTを仮定することもできるであろう。不定単数形総称文の不定冠詞はanyの意味であると言われるが、そのような観察も隠れた演算子の存在を示しているように

思われる。数量化という視点からみれば、不定単数形総称文は必ず何か数量詞を持たなければならない。

(23) に仮定される見えない数量詞は、Leslieの考える暗黙の演算子Genとは異なる。Genは無冠詞複数形の総称文にも含まれているはずの演算子であるが、(26) はMajority Genericの例であり、必然性の含意がなくとも容認可能だからである。ただ、見えない数量詞が2種類あるということになれば「総称文の謎」の説明を困難にするものであり、改めてGenという暗黙の演算子の存在を問い直す必要もあるであろう。

不定単数形の総称文が必ずGen以外の何らかの数量詞を必要とするとなると、3歳以前の幼児にはそれが正しく使えないことも予測される。これは必ずしも幼児の発話に不定単数総称文が出てこないことを意味するのではなく、無冠詞複数形との区別がつかないことを予測する。すなわち、(25) のような文も複数形と同様に解釈されることになるであろう。

### 3. 2. 総称文の種類と子供の認知能力

前節では、不定単数形と無冠詞複数形の総称文の違いは、数量的な能力が身につく以前の幼児には捉えられない、という予測をMajority Genericを例に挙げて論じた。すなわち、システム2の数量的な能力を持たない幼児にとっては、Principled Generic、Characteristic Generic、Majority Generic、Striking Genericという分類自体が意味を持たないということである。幼児は、数量的な違いには鈍感であって、すべてをデフォルト的認知能力に従って直観的に取り扱っているはずである。このように考えてくると、注3で述べたように、数量的でない総称文に数量化の論理表示を与えるべきかどうか、という問題が出てくる。総称文には、たしかに数量的論理表示を必要とする側面があり、LeslieはGenの非数量的側面を指摘しながらも、総称文の論理表示としてはGenを含んだ3部構造を仮定しているのであった。ただし、その論拠は大人のシステム2の能力を反映したものであるかもしれない。問題をややこしくしているのは、システム1に従った幼児の総称文の解釈が大人にもそのまま残っており、さらにシステム2による数量的な解釈が加わってくることである。無冠詞複数形の総称文は、最も汎用的な形式であるため、常に二重の解釈を受ける可能性がある。不定単数形は特殊な形式であり、数量的な解釈に特化している。ただし、幼児は使い分けができないため、解釈しようとするれば誤って無冠詞複数形と同じ解釈を与えざるを得ない。

幼児の総称文解釈については、種についての単純な属性記述の形式が適切

であるかもしれない。そうすると、大人の総称文解釈には、属性記述タイプと数量的3部構造タイプの両方が共存することになる。もし、幼児の総称文解釈が、3部構造の論理表示を持たないならば、注3で述べた(27)の文の曖昧性が幼児にとっては存在しないという帰結になる。

(27) Typhoons arise in this part of the pacific.

幼児に対して、(27)の曖昧性の有無を実験的に確かめるのは困難かもしれない。日本語については、この文の2つの解釈は、曖昧性ではなく、別々の文として区別される。日本語では、助詞「は」の使い分けによって論理表示がそのまま文として実現されるからである。数量詞Genが存在するかどうかは別として、制限節(restrictor)と中核領域(nuclear scope)に分かれた構造が、表層構造にそのまま現れている。

(28) [台風は][太平洋のこの地域で生じる]

(29) [太平洋のこの地域では][台風が生じる]

助詞「は」の使い分け能力と数量化の能力が同じものであるかどうか、が新たな問題として生じる。(28)と(29)の違いを、日本語を習得中の幼児は早い段階で区別できるであろうか。日本語においては、(28)と(29)の違いが属性記述の能力だけで処理できることも十分考えられるからである。あるいは、「は」の使い分けがシステム2の能力に密接に結び付いている可能性もあるが、いずれにしても事実の問題として解決すべき課題であろう。そのことが、見えない数量詞Genを仮定すべきかどうかの解決にもつながるであろう。

### 3. 3. Striking Generic再考

Leslieの総称文に対する基本的な考え方にはStriking Genericの存在が大きな影響を持っている。非常に稀な出来事であっても、人間の生死に関わるような内容であれば総称文として成り立つ。たしかに、幼児にとってそのような警告を理解する能力は重要であり、素直にそれを守る個体が生き残ってきたとすれば、生まれながらにそのような能力の基盤ができていながらも納得が行く。しかしながら、Striking Genericは(7)や(9)のような危険な内容のものばかりではない。

(30) Frenchmen eat horsemeat. (フランス人は馬肉を食べる)

この総称文は、該当者がごく一部でありながらフランス人の特徴を表しているという点でStrikingではあるが、この総称文を知っているからといって生存上特に有利になるわけではない。馬肉を食するという事は、世界の食事事情からは特異なものであって、「あんなものを食べるべきではない」という警告的な含みがないわけではないが、Striking Genericを危険性の警告ということから切り離して考える必要があるだろう。

この用例については、かつて研究対象としたことがある(岩部(1999))。この例文を論理的に解釈するならば、一般に「馬肉は食べない」という認識があって、「フランス人については必ずしもそれが成り立たない」という二重否定の構造をしていると思われる。

(31) It is not the case that Frenchmen don't eat horsemeat.

下に再掲する(9)についても同様であり、これを論理的な文で書き換えると(32)のようになる。

(9) Sharks attack bathers.

(32) It is not the case that sharks don't attack bathers.

Striking Genericがごくわずかのサメにしか当てはまらなくても成立するのは、このような二重否定の解釈を受けた結果であると理解できる。ただし、二重否定への書き換えは否定に関する高度な論理的演算能力を必要とするであろう。したがって、システム1の認知能力しか備えていない段階の幼児には無理であると予測される。そもそも二重否定の文と単純な肯定文は同義ではない。肯定形の(9)が数量を問題にしないシステム1を前提にした総称文であるのに対し、(32)がシステム2を前提にした書き換えであるとすれば、論理的等価性が成り立たないことは問題ではない。大人になってからもシステム1に基づいた(9)を維持しつつ、システム2の能力を前提にした(32)が理解できるようになるからである。

Striking Genericという分類自体、幼児の段階では意味をなさない。3.1.においてMajority Genericについて述べたことがここでも同様に当てはまる。

このような総称文の分類自体が大人の認知能力を前提としており、幼児にはそのような区別はないと考えられるからである。再確認しておかなければならないのは、大人においてはシステム1とシステム2が共存している点である。人間の認知能力が複合的であることに対応して、総称文も複合的な体系をなしている。

### 3. 4. Majority Genericと論理的判断

Leslieによれば、総称文が成り立つためには肯定的反例のないことが必要であった。大多数のカナダ人が右利きにもかかわらず例文(33)が偽になるのは、「左利きのカナダ人」という肯定的反例があるからである。

(33) #Canadians are right-handed. (カナダ人は右利きである)

それでは、LeslieがMajority Genericの典型例としている(34)はどうだろうか。

(34) Barns are red. (納屋は赤い)

Barnをネットで検索してみれば、レンガ色をした写真が数多く見つかる。しかし、白いものや黒っぽいものもある。このような納屋は(34)に対する肯定的反例にならないのだろうか。もし否定的反例であるとすれば、黒や白の納屋を一括して「赤くない納屋」として取り扱うことが必要である。<sup>5</sup> ここでは、一見肯定的反例に見える例を一括して否定的に扱う操作が含まれており、このような論理的判断もシステム2の認知能力を前提としていると思われる。ここでもまた、総称文が複合的な現象であり、システム1に属する面とシステム2に属する面に切り分けることが重要であることを確認しておきたい。

### 3. 5. 定単数形と数量化

定単数形総称文の研究はあまり進んでいない。そのような中で、Leslie et al. (2009)の実験は非常に興味深い。彼女らは以下の用例を用いているが、上の3文がMajority Genericの例であり、下の3文がStriking Genericの例である。彼女らはまずPrasada & Dillingham (2006, 2009)の所見を元に、不定単数形や定単数形の容認度が無冠詞複数形に比べて低いことを確認している。

(35) Barns are red. (Majority Generic)

- (36) ?A barn is red.  
 (37) ?The barn is red.
- (38) Sharks attack bathers. (Striking Generic)  
 (39) ?A shark attacks bathers.  
 (40) ?The shark attacks bathers.

それに対して、彼女らの実験結果によれば、(35) や (38) の無冠詞複数の例についても、Principled GenericやCharacteristic Genericに比べると容認度は落ちるのであるが、それでも多数の話者がこれらの文を容認する。(36) は、数量詞がないために容認不可能であることをすでに論じた。(38) と (39) の差は小さく、不定単数形のStriking Genericの容認度はMajority Genericの場合より高い。それでも不自然とする人の方が若干多い。<sup>6</sup>

さて、定単数形の例は、見かけ上不定単数形と同様の振る舞いを見せているが、(37) や (40) の容認度が落ちる理由は不定単数形とは異なると思われる。実験結果によれば、(37) の容認度は (35) よりやや低い程度で、過半数の話者が自然と捉えている。その一方で、定単数形のStriking Genericの容認度は低い。(40) は、(37) よりも明確に不自然とされており、不定単数形の (39) よりも悪い。このように、不定単数形と定単数形は同等には扱えない。本稿においても、現時点では (37) や (40) の十分な分析はできないが、可能な範囲で説明を試みてみたい。まず、不定単数形と異なり、定単数形が種を表せることはすでに述べた。用例を追加すれば、例えば (41) が可能である。

- (41) The owl is common.

すなわち、不定単数形と異なり、総称文となるために数量詞が必要なわけでもないし、特に内在的必然性が求められることもない、ということになる。そうであれば、(37) が比較的容認度が高くても不思議ではない。ただし、岩部 (2012) でも指摘したように、定単数形は抽象概念であって、具体的な個物やその集合ではないことが知られている。また、定単数主語は良く確立された種 (well-established kind) を表さなければならぬとされている。すなわち、定単数主語は話者と聞き手で共有された概念を表していると思われる。このような概念が頭の中にできあがっていくためにはかなりの経験が

必要と思われ、幼児期にそれを期待することはできない。すなわち、定単数形総称文は数量化とは別の理由で、大人になるまで正しく使い分けることができないことになる。したがって、幼児期のデフォルト的一般化には使えない形式なのであろう。システム1では使えないという点では不定単数形と共通しているが、その理由は別であり、そのことが定単数形が不定単数形と類似の振る舞いを示しながら、個別的には違った特徴を持つということにつながっていると思われる。

#### 4. 英語総称文の多様性と日本語

総称文のない言語は知られていない。また、総称文は目に見える数量詞を伴わないという点も各言語に共通している。しかし、英語の総称文には、主語が無冠詞複数形、不定単数形、定単数形の少なくとも3つの形があることをすでに見た。もし、総称文がデフォルト的一般化を行うだけのものであって、単一的な言語現象であるならば、このような多様性は必要ないはずである。すでに不定単数形や定単数形とシステム2との関係を指摘したように、英語における多様な総称文の形式は、大人における複合的な認知能力を反映していると推測できる。その一方で、日本語には冠詞がなく単数・複数の区別もなく、英語とは総称文を表現する方法が異なる。それでは、日本語の総称文には多様性がないのであろうか。

英語の不定単数形に対応する日本語として「というもの」という表現を当ててみよう。

(42) A dog has four legs. (犬というものは4本脚である)

(43) ?A table has four legs. (?テーブルというものは4本脚である)

(43) のように、不定単数形が不自然な例に「というもの」を当てるとやはり不自然である。「というもの」がなければ日本語に不自然さはないので、この表現は無冠詞複数に対応するとも考えられる。日本語の「というもの」という表現は英語の自由関係詞節を想起させる。英語の自由関係詞節には、定単数形、定複数形、無冠詞複数形に対応する3種類の読みが可能であると Hinterwimmer (2013) が指摘しており、(44) に対しては、容認可能性の違いから、(45) の定複数形ではなく、無冠詞複数形の方が対応すると述べている。

(44) What sounds plausible at first reading is not always true.

(45) (??The) Things that sound plausible on first reading are not always true.

そもそも、自由関係詞節には文法的な定・不定、単・複の区別がなく、(44)が不定単数形に対応していても不思議ではない。この例では、alwaysという数量詞があることから、不定単数形への書き換えも可能であると思われる。そして、この状況は日本語に非常に似ている。英語の不定単数形に対して日本語の「というもの」のように、言語によって方法は異なっても、総称文にはそれぞれの言語で多様な表現が対応していると思われる。多様性が大人の認知能力の複合性を表現するためのものであるならば、個別言語特有の表現はシステム2に関係しているという見通しを持つことが可能になる。英語においては複数形がデフォルトの形式であって、単数形の方が英語特有の表現ということになるが、興味深い課題として追求することができるであろう。

(42) では、名詞句に「(という)もの」を付けたが、日本語では、文全体に「もの(だ)」を付けることも可能である。

- (46) a. 犬は[吠えるもの]だ  
b. [犬は吠える]ものだ

(46) の2つの文には、統語的曖昧性があり、(46a) から (46b) が派生したとも考えられるが、日本語話者は2つの文の意味の違いを捉えることができ、総称文の多様性の一例と考えられる。

## 5. ことわざと社会的偏見

岩部 (1998) で論じたように、ことわざにおいては、相反する内容を持つものが共存している。それは、英語でも日本語でも変わらない。例えば、次のabの対がそうである。

- (47) a. 人を見たら泥棒と思え。  
b. 渡る世間に鬼はない。<sup>7</sup>  
(48) a. 急がば回れ。  
b. 善は急げ。  
(49) a. 正直は一生の宝。

b. 嘘も方便。

命令文や存在文の形式を取り、通常の総称文の形式を取らないものも多いが、一般化を表すという意味では総称文の形に書き換えることが可能である。ごく簡単に書き換えるならば (47) は (50) のようになるだろう。

(50) a. 人間は悪である。

b. 人間は善である。

この2つは明らかに矛盾しており、論理的には両立しえない。もし、両立するように解釈するならば、岩部 (1998) で述べたように、対立することわざを相互に否定しあっているものと解釈することになるであろう。

(51) a. 「人間は善である」とは言えない。

b. 「人間は悪である」とは言えない。

この図式は、すでに見た (9) を二重否定にした (32) と類似のものである。

(9) Sharks attack bathers.

(32) It is not the case that sharks don't attack bathers.

ここでも、(51a) と (50a) は論理的に等価ではない。(51a) はごくわずかの悪人の存在によって真になる。(50a) が、総称文として普通に解釈されるならば、大多数の人間は悪人であるという一般化をしているように受け取られるが、実際には (51a) が成り立つ世界において (50a) を使用することができる。すなわち、(50a)、そしてそのことわざ形式である (47a) は Striking Generic として解釈されるということである。(47a) は危険を警告している内容であるから、Leslieの指摘する典型的な Striking Generic の性質にも適合している。その一方で、(50b) とそのことわざ形である (47b) には警告的な意味はないことに注意しなければならない。

以上のような観察は、総称文の複合的な性質から整理することができるであろう。数量的・論理的認知能力を前提にすれば、ことわざを (51a,b) のように再解釈することもできる。しかしながら、ことわざそのものは、むしろ幼児の時期から大人になっても維持されているデフォルト的一般化の能力

を反映した認識を示しているように思われる。本稿で繰り返し指摘しているように、この認識は数量的・論理的認識からは独立したものである。

このように、ことわざは、システム1の認知能力が大人になってからも機能し続けていることを示す例と考えられる。実際この認知能力は、非常に根強く人間の認識を支配しており、社会的偏見の生じる元にもなっていると思われる (Leslie (in press)<sup>8</sup>参照)。例えば、Striking Genericの代表例であるSharks attack bathersが総称文として受け入れられるのとまったく同じように、次のような総称文もまた受け入れられてしまうであろう。

(52) Muslims are terrorists. (イスラム教徒はテロリストだ)

人間は、このような一般化を鵜呑みにして信じるという性質を生まれながらにして持っていることに注意しなければならない。生存に利するとされたStriking Genericの裏の面と言えよう。(52)に見られるような社会的偏見は、数量的演算を省いたデフォルト的認知能力に原因があることを明確にし、それを認識論的に克服することも総称文研究に課せられた課題である。総称文は、人間の認知能力の根幹にあり、言語学、哲学、心理学はもちろん、社会学、教育学にも深く関わっているのである。

## 注

1. 一定の文脈が与えられないと判断に留保条件を付けられることがある。(6)に対して「雌の鳥はね」とか、(9)に対して「ほんのわずかの例だけどね」等である。しかし、総称文の内容が否定されるわけではなく、受け入れられない総称文との判断の差は明確である。

2. Cohenは領域分割(partition)と均質性(homogeneity)という概念によって、(10)や(11)が容認不可能であることを説明しようとしている。また、後述するようにLeslie (2008)は肯定的反例(positive counter-instance)という概念によって、これらを説明しようとしている。

3. 数量的に特定されない総称文に、有標数量詞と類似の数量化分析を用いるかどうかには疑問の余地がある。Leslieは、Genと有標数量詞との違いを主張しながらも、総称文は3部構造の論理形式を持つと仮定している。例えば、次の例文の曖昧性を説明するためには、2つの論理形式を区別する必要があり、それは制限節と中核領域に入る要素の違いとして説明されなければならないからである。日本語で示したように、(iia)は台風について的一般化であり、

(iib) は太平洋のこの地域についての一般化である。

(i) Typhoons arise in this part of the Pacific.

(ii) a.  $\text{Gen}_x$  [Typhoon (x)] $\exists$ [this-part-of-the-Pacific (l) & arise-in (x, l)]  
[台風は、太平洋のこの地域 (のどこか) で生じる]

b.  $\text{Gen}_l$  [this-part-of-the-Pacific (l)] $\exists_x$ [typhoon(x) & arise-in(x, l)]  
[太平洋のこの地域では、台風が生じる (ことがある) ]

4. Leslie et al. (2009) の実験によれば、(15) ~ (18) に対応する無冠詞複数形の (5) (6) (8) (9) がすべて同等に容認可能なわけではない。Principled Genericの (5)、Characteristic Genericの (6) が文句なしに受け入れられるのに対し、Majority Genericの (8) や Striking Genericの (9) では複数形であっても不自然と感じる人がかなりいる。ただし、単数形では不自然と感じる人がさらに増え、容認する人と数的に逆転してしまっている。

5. 「白い納屋」は「赤い納屋」に対する肯定的反例ではなく否定的反例であるとする、Leslieの言う肯定的反例の位置づけは単純ではなくなる。Cohenの領域分割 (partition) をどのように規定するかという問題と同等の課題になるであろう。

6. Striking Genericの不定単数形がかなり良いという結果について、Leslie et al. (2009) は、「問題の (サメが危険であるという) 属性は、ごく一部の個体においてしか発現しないものの、種全体の特徴であるから」という趣旨のことを述べている。

7. 「渡る世間は鬼ばかり」というドラマのタイトルがある。本来教訓を述べるはずのことわざを完全にひっくり返した表現であるにもかかわらず、違和感なく受け入れられるのは、同趣旨のことわざである (47a) が存在しているからであろう。

8. Leslieは多くの論文を自身のWEBページで公開しており、この論文も含めて本稿で参照した文献はすべて以下のURLで読むことが可能である。  
<https://www.princeton.edu/~sjleslie/publications.html>

#### 参照文献

- Cohen, A. (1999a) *Think Generic!: The Meaning and Use of Generic Sentences*. Stanford: CSLI Publishers.
- Cohen, A. (1999b) "Generics, Frequency Adverbs, and Probability," *Linguistics and Philosophy* 22: 221-253.
- Cohen, A. (2004) "Generics and Mental Representations," *Linguistics*

- and Philosophy* 27:529-556.
- Hinterwimmer, S. (2013) "Free Relatives as Kind-Denoting Terms," A, Mari, C. Beyssade, and F. D. Prete (eds.) *Genericity*, 140-156, Oxford: Oxford University Press.
- Hollander, M. A., Gelman, S. A., and Star, J. (2002) "Children's Interpretation of Generic Noun Phrases." *Developmental Psychology* 36: 883-94.
- 岩部浩三 (1998) 「総称文と一般化」『英語と英米文学』33: 1-28, 山口大学.
- 岩部浩三 (1999) 「存在的総称文と一般化の階層性」稲田俊明他編『言語研究の潮流』, 51-66, 開拓社.
- 岩部浩三 (2012) 「演繹と帰納—総称文における数量化について」『英語と英米文学』47: 1-27, 山口大学.
- Kahneman, D. (2002) "Maps of Bounded Rationality: A Perspective on Intuitive Judgments and Choice," *Nobel Prize Lecture*.
- Leslie, S.J. (2007) "Generics and the Structure of the Mind," *Philosophical Perspectives* 21-1: 375-403.
- Leslie, S.J. (2008) "Generics: Cognition and Acquisition," *Philosophical Review* 117- 1 : 1-47.
- Leslie, S.J. (in press) "The Original Sin of Cognition: Fear, Prejudice and Generalization," *The Journal of Philosophy*.
- Leslie, S.J., Khemlani, S., Prasada, S., and Glucksberg, S. (2009) "Conceptual and Linguistic Distinctions between Singular and Plural Generics," *Proceedings of the 31st Annual Cognitive Science Society*. Amsterdam: Cognitive Science Society.
- Leslie, S.J. and Gelman, S.A. (2012) "Quantified Statements are Recalled as Generics," *Cognitive Psychology* 64: 186-214.
- Prasada, S. (2010) "Conceptual Representation and Some Forms of Genericity," F. J. Pelletier (ed.) *Kinds, Things, and Stuff* , 36-59, Oxford: Oxford University Press.
- Prasada, S. and Dillingham, E. (2006) "Principled and Statistical Connections in Common Sense Conception," *Cognition* 99-1: 73-112.
- Prasada, S. and Dillingham, E. (2009) "Representation of Principled Connections: A Window onto the Formal Aspect of Common Sense

Conception," *Cognitive Science* 33-3 : 401-448.